

関西農村センター便り

第55号

☎ 675-2241 加西市段下町880

☎ 0790 (48) 3327

ホームページ <http://www.uccj-kansai.org/>

関西農村センター運営委員会 発行

2013年12月1日

第51回農村地方教会教職信徒協議会報告

— あの時の青年は今? —

関西農村教化研究所では過去に多くの事業を開催して参りました。中でも関西農村青年大会は、22回(年1回開催)と長期にわたり開催しています。多くの若者が集まり、夜を徹しての討論も交わされていました。あの時の青年は今各教会の中核であろう。今回の協議会のテーマは「あの時の青年は今」と決めました。

関西農村青年大会は一応22回で終了しましたが、1997年に青年大会に参加した数名の方が久しぶりに集まって話し合ったのが、志年大会OB会の始まりで、その後年に1回開催されてきました。九州で開催された第4回から全国集会になり、会を重ねるうちに、名称も全国協議会になりました。ここには毎年嘗ての青年が多く集まりました。今回の協議会はこのメンバーにも呼びかけました結果、信徒の方が16名参加して下さいました。教師も10名参加して下さいました。

今回の協議会のテーマについて運営委員会では、かつての青年たちが、彼らの信仰に突き動かされての熱い思いや、行動を生で語っていただき、次期世代へと伝えて頂きたいという願いもありました。若者の農業離れと言われ続けて久しいものがありますが、一方で積極的に農業に関わり、地道に新しいチャレンジをしている青年たちもあると聞いています。同時に、放射能、TPPなどかつてはなかった新しい問題も生じています。こうした現場の若者たちに、何を伝えて行くのか、そのギャップをどう埋めるのか、伝えたい思いを受け止めてほしいと願いましたが、残念ながら若者の参加はありませんでした。

開催日時：2013年6月24日(月)午後1時～25日(火)正午

開催場所：日本基督教団飯盛野教会(宿泊：いこいの村はりま)

参加人数：26名

プログラム

第一日

開会礼拝(司会 穂積修司運営委員 兵庫・播磨新宮)

説教 佃真人兵庫教区副議長(宝塚)

挨拶 小林利明関西農村センター運営委員長

主題講演「あの時の青年は今？」

鳩田将雄（隠退・元神戸神愛教会）

パネル・ディスカッション（司会 柳谷舟子運営委員 兵庫・甲南）

パネリスト 佐藤謙吉（関東・島村）

小林利明（兵庫・飯盛野）

（いこいの村はりまへ移動）

夕食（卓主 田中隆幸運営委員 兵庫・但馬日高）

懇親会（司会 稲垣 馨運営委員 兵庫・隠退）

第二日（飯盛野教会）

分団協議 総合司会 井上勇一運営委員（京都・洛南）

教師グループ司会 井上勇一

信徒グループ司会 小林利明

閉会礼拝

説教 奥野彦藏関西農村センター長（兵庫・教務）

（昼食後散会）



主題講演「あの時の青年は今？」（要旨）

鳩田将雄

聖書Ⅱテモテ2章1～13

「関西農村基督者青年大会」と並んで「関西農村教会教職信徒協議会」、「日曜学校教師研修会」、「福音学校」もあった。今回の「第51回農村地方教会教職信徒協議会」がどこから受け継ぎどのように数えてのものであるのか。その対象も内容も不明。しかし、軸はかつての農村青年大会に違いない。

今回の主題が意味するものは何か。この会合の後継者はあるのか。農村秘宝教会教職信徒協議会という名は何か。単なる自己満足・自慰行為に過ぎないならば何の目的もない。かといって、そういう状況をバルコニーから眺めるように「あの時の青年は今」というなら言語道断である。

そうであってはならない。これは自分の問題なのだ。昔、私どもの先輩が「後ろ向きの預言者」という言葉を残して下さった。預言者は決して過去を無視しないどころか、過去をしっかりと見つめ、そこにある神様の業と信仰者の歩みに目を留めている。カール・バルトは絶筆の中で教会の働きということについて書いている。教会の出発には「あたらしい出発、立ち帰り、告白」があることを示唆している。

「関西農村センター」について教区の事務所に問い合わせると、「全国で名前が残っているのは、関西農村教化研究所だけでそれも有名無実です。」という返事が返ってきた。何らかの集会がここを会場にして開かれていると言うだけの事なので教区では有名無実だと言う。今回の主題がいよいよ関西農村教化研究所の働きも締めくくりの時が来たことを示していると思う。

一体、私どもの1948年から始まり22年間続いた「関西農村基督者青年大会」や諸集会は何であったのか。あの時の岡田正夫牧師、岡林勝治牧師、林理吉牧師、吉田政治郎牧師、坂井権一牧師、遠藤信次郎牧師、橋本通牧師、岩塚富次郎牧師、ノルトン宣教師、ドリスキル宣教師など、先達は何を目指し何を伝え残そうとされたのか。そして、私たちはそれを受け継ぎ守っているのか。そして今、私たちの信仰の継承者はどうなっているのか。私たちの子どもや孫はどうなっているのか。教会の柱になっているのか。当時の仲間たちはどうしているか。自分たちだけで自己満足していて良いのか。今自分が所属する教会は生き活きと福音に生きる喜びに満ちているのか。自分自身わが子にわが孫に「私に倣いなさい」「私たちのような夫婦になりなさい」といえるのか、を考えて、どこから「あの時の青年は今」を考えるのか。

「古くして取り残されてゆくもの、新たにやってくるもの、この二者が、真に互いを識り、また互いを真なるものとして承認し合うとき、そこにこそ一つの新しい出発は起こります」(バルト)と言われているのが、私たちが、この集会を実りあるものとするためにはこの新しい出発を自覚するためには、私たちはその伝承を受け継ぐものとしての責任において、「あの時の青年は今」と問わなければならない。

第5回の河内長野教会での「関西農村基督者青年大会」1952年(昭和27年)では「むしろ旗」を立てた。「主イエスのご復活の証人なのだ」、と言うことで、「本当に私たち主イエスのご復活を信じているのか」と言う問いが突きつけられていた。ここ飯盛野教会での大会では朝早く大きな十字架を担いで飯盛山に登り早天祈祷会を開いた。そして、主イエスの証人として生きる姿として「聖日礼拝を

厳守せよ」と言うことが訴えられ、宣言文を作るときには「聖日礼拝を死守せよ」と言う発言にまで発展した。牧師も信徒も必死であった。牧師が必死でああったから青年たちも必死になっていた。青年たちが自分の将来を決める時、職業を選ぶ時、自分の教会生活を中心に考えたはずだ。自分が今所属している教会で信仰生活を全うし自分の教会をキリストの体とする信仰生活を全うするには、という判断で職場を選んだのだ。教会の青年はそういう青年たちだった。教会の若い母達は、日曜日に開かれる小学校の運動会に朝から行く者はいなかった。礼拝が終わってから学校に駆けつけたものだ。それらの子達は信仰を受け継いでいる。海外旅行に行っていた青年が日曜日の礼拝を守るために友達と別れて早く帰国するのが自然だった。その青年は牧師の妻となり長男は牧師、娘は教会の幼稚園で働いている。

今は如何か。牧師がサラリーマン化した、といわれる。牧師がそうだから信徒も同化される。主の日の礼拝を休むことに苦しみを覚ええない。牧師が世俗になるから信徒も同じように腰ぬけの信仰者になっている。

私は日本のキリスト教信仰の原点の一つにキリシタン殉教の歴史を見る。私たち信仰の祖先は迫害という極限状況の中で信仰を守り通した。その秘訣は一言でいえばよく訓練されていた故に、といえるであろう。あの迫害下で教理を学び祈りを重んじ教会歴を作り、制度を固め、愛の奉仕活動を福祉事業を盛んに行っていた。そして286年もの長い間、迫害下に潜伏し神父も居ないのに信仰を守り通してしたのだ。「世界の奇跡」と呼ばれた。

宗教改革者は私たちに教会の基準を教えてくれている。御言葉が正しく語られかつ聞かれ、聖礼典が正しく執行され御言葉による訓

練が正しく行われるところに教会は建つのである。牧師が本気で説教しておれば、必ず教会は建つ。同時に教会堂も必ず建つ。

今の教会に欠けていることは「教理の確立」と「訓練」である。実は今の教団には教理はないから訓練ができない。問題は日本基督教団にはどこにも権威はない。教団の教会なら何をしてもかまわない、何を言ってもかまわない。聖餐を受けるのに洗礼は関係ない、そこでは「人権が偶像になっている」のである。「あの時の青年は今」と問われなければならない事態は、実は枝葉の問題なのだ。それは今始まったことではない。敗戦後からすでに日本基督教団の牧師で『主にある兄弟』と言えない人がいたのだ。日本基督教団ほど危ない教派はないと言うことだ。信仰告白が出来ても建前に過ぎず、体裁が整った、と言うに過ぎない。「あれは作文だ」と言われても不思議ではない。日本基督教団は信仰がないのに信仰告白文ができるという不思議な教団だ。

先ず、自分たちお互いの信仰が「主にある兄弟・姉妹」と言う交わりを持っているのか。先ず、自分の信仰の系列を確かめ、その特色において、信仰の訓練を受けることが基本だと信じる。その基本は 2000 年の教会の歴史を貫いている、「神の前に」という信仰だ。人間が相手ではない、この世の評価が問題なのではない。「人に喜ばれようとしているのか、それとも神に喜ばれようとしているのか。あるいは人の歓心を買おうと努めているのか。もし今もなお人の歓心を買おうとしているとすれば、わたしはキリストの僕ではあるまい。」(ガラテヤ 1:10)「神の前に (coram Deo)」である。それが子や孫に「私のようになりなさい」と言える道だと信じている。

(この文章は、出版誌の都合で原稿の五分の

一に縮めねばなりませんので、ずいぶん粗雑になりました。悪しからずご容赦下さい。もし、ご要望がございましたら送料不要で元原稿文章をお送りいたしますので、メールでもお葉書でもなんでもかまいませんから、お申し付けください。Tel&Fax078-994-6424 メール tokkin@hi-net.zaq.ne.jp)

分団報告 (協議会第 2 日)

信徒グループ

(報告者 小林利明運営委員)

参加者が今何をしているか、何をしなければならぬかを話し合い、元気を出してゆこうと確認し合いました。以下は話された内容です。

◎年齢の事を考えたらアカン。何かを始める、そう、できることから発信して行く。

◎九州では 1 回 OB 会を開催した。今後も出席出来る限りは、出席したい。

◎自分自身考えるの事の大切さを感じ、この会に出席した。一つのテーマになってうれしく思います。

◎地域の人たちに心を開いてお付き合いすることも大切だと思う。

◎子どもの教会、夏期学校で私の出来ることをしたい。お楽しみ会か、前進する教会か、修養会のテーマに考えている。

◎罪の救いはキリスト者しかないと思う。

◎OB 会の 2 回から 15 回迄出席した。子羊会にも出席出来て感謝している。近所の人に教会に行っていることは話していないが、家庭集会はしている。家で出来た野菜をテンプラにして食べてもらっている。多くの人が集まってくれる。CS でもトウモロコシの刈り取りや、試食会等。今 74 歳身体を使って動いているが、いつまでやれるか。

◎今でも青年と思っている。志しは持ち続け

て行きたい。

◎限られた中ではあるが、神様に仕えて行きたい。

◎自分の出来ることをする。

◎1～2年に1回しか出席しない信者を教会に呼び戻すことが大切。しなくてはならない事は、感動をどうやって伝えるか、後世につなぐ、火種を消さないで行く、知恵を働かそう。

◎「あの時の青年は今」とは、あの時の事を懐かしむだけでなく、過去を検証し、今どうすべきか、何をなすべきか、何ができるかを考え行動することが大切。

教師グループ

(報告者 井上勇一運営委員)

関西農村センターの歩みを振り返り、参加者は、1950年～1970年の間、関西農村センターを会場に20回にわたり開催された「関西農村青年大会」に参加した青年たちの信仰・その志を考えた。主題講演は元神戸聖愛教会鶴田(トキ)将雄牧師が担当し、長老主義に立つ教会形成と信仰訓練について語った。

この主題講演を受けてパネル・ディスカッションがなされ、島村教会佐藤謙吉牧師と飯盛野教会の信徒小林利明さんが発題した。翌日には教師と信徒とに別れ分団がされ、最後に全体会をして締めくくった。

当時の地方教会、農村教会は、キリスト教ブームの影響を受け、多くの青年達が教会に集い、活況を呈した。今その青年達が70才

半ばから80才半ばを迎え、「農村教会に信仰の灯し火をどう灯し続けることができるか。」、真剣な討論が為された。

教師分団と全体会を報告するが、参加した教師はバテンプ揃いで、それぞれに経験談をとおして農村教会の過去と今を報告した。一様に反省できる点を、教区、地区の連合体が農村教会を孤立させてしまったこと、その結果、教勢低下、財政的な自立を困難な状況を作り出した。と教会の連携の薄さを反省として語った。そして、地道に地域社会にかかわり続けること、人間関係のつながりを築く努力、都市教会と農村教会との連携などを推進することを話し合った。これらの連携によって農村教会が生き延びることができるか、他にも山積した課題があることを踏まえても、一步踏み出すことを確認した。

また、全体会においても、教会の在り方が問われ、もう一度その在り方を問いたすことが求められている。特に教会は地域社会に「寄り添う」ように、「優しさ」を強調して宣教してきたが、献身することの厳しさを教育することも大切と講師は強調した。

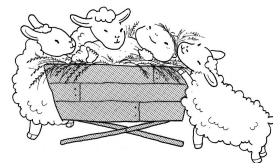
プログラム全体をみると、参加者のほとんどが懐古的に教会を捉えず、今の教会の現状を振り返る中で、行き詰まりを覚える農村宣教を前に「いま、何ができるか、何をしなければならぬのか」、そのことを真摯に考える場となった。

コラム「KILM(キルム)」とは？

「KILM(キルム)」は、ホームページ開設時に考案された関西農村センターの正式名称「関西農村教化研究所」の愛称です。

「ILM(イルム)」は'Institute of Local Mission'の頭文字3字で、その最初にKansai(関西)のKを付けて

「キルム(KILM)」となりました。



関西農村センター支援のお願い

当センターの活動は兵庫教区や関西4教区よりの協力金の他、各教会や個人の皆様からの後援会献金によって運営されています。以下で、その報告をするとともに今年度もご協力をよろしくお願い致します。振替用紙を同封させていただきますので、ご利用下さい。

後援会献金報告 (順不動、敬称略)

ご支援ありがとうございました。

2012年度後援会献金

21教会・伝道所、団体+10個人 合計 206,000円

(兵庫教区の教会・伝道所・団体)

宝塚教会／甲子園双葉教会／相生教会／播磨新宮教会／神戸教会／須磨教会／
香住教会／芦屋三条教会／夙川東教会／但馬日高伝道所／豊岡教会／
姫路和光教会／生野教会／尼崎教会／摂津三田教会／播州地区

(計) 119,000円

(他教区の教会・伝道所・団体)

大阪東十三教会／洛南教会／大津教会／池田五月山教会／農村伝道神学校

(計) 85,000円

(個人)

宇都宮佳果／田中彊／穂積修司／田中隆幸／小林利明／渡辺建治／
大野顕二／柳谷舟子／中村一義／小林明

(計) 52,000円

関西農村センター事務局からのお願い

当センターでは、業務に用いるため、コピー機の献品を求めています。入替えなどでご不要になった機器に、お心当たりのある方は、下記までご連絡ください。

農村センター (0790)48-3327 または 080-3819-6106 (奥野)

